

18	豊田	四郷小学校	コトウヤミ カウミヅ 氏名 ○近藤靖恵・加藤光咲
分科会番号		11	分科会名 保健体育（保健）

研究主題

自他ともに尊重しあい仲よく生活できる四郷っ子の育成
—発達段階に合わせたセイ（生命・性）の学びとソーシャルスキル学習を通して—

四郷小学校 現職教育部

1 はじめに

本校は、全校478人の中規模小学校である。明るく素直な子どもが多い一方で、新しい住宅地・マンションが学区内全体にできはじめ、転出入が多く上手く学校に馴染めない子どもがいる。中には、クラスの中で何度も喧嘩をしたり、平気で級友を傷つける言動をしたりしてしまう子どもや、無気力になったり、集団生活に適応できなくなったりする子どもも複数いる。令和7年度、不登校傾向にある児童が2年生1名、4年生2名、6年生1名、別室登校をしている児童が8名いた。全校の児童を対象にアンケートを取った結果、自分のことを大切だと思わない子どもが12%、自分のことが嫌いだという子どもが20%いることがわかった。若年層の自尊感情の低下や、生命に関わる事件・事故も増えていると報告されている。こうした状況の中で、学校教育が果たす役割はますます大きくなっている。

近年子どもを取り巻く環境が大きく変化し、ネット上には性に関する情報が氾濫し、間違った性に対する知識を得ていることがある。情報があふれる今の時代だからこそ、子どもたちが命の大切さを自分の言葉で理解できる学びが必要である。性に関する基本的知識の習得やジェンダーに関する理解を含む包括的性教育を通して、発達段階に合わせたセイ（生命・性）に関する学びは重要であると考えた。また、コロナ禍では、人とのつながりやふれあいが制限され、ネット上でのつながりがコミュニケーションの新たな手段の1つとなった。今日ではネット上でのつながりが主流となり、顔が見えないコミュニケーションが増え、現代の子どもたちは人と対面で関わる力を育む機会がないまま育ってきた。制限がなくなった現在においても、本来であれば自然に身につくはずであった他者と関わる力が十分に育っていない子どもが見られる。その結果、対人関係に悩む子どもが増加している。そこで、性教育、ソーシャルスキル学習を全校で計画的に取り入れることによって、自己肯定感を高め、自他ともに仲よく生活できる子どもを育成したいと考えた。

性に関して正しく行動し、命を大切にする態度を育むためには、担任や養護教諭、外部講師が連携し、共通認識のもとで性教育を実施することが重要である。また、自分の特性を理解し、他者と適切に関わる力を育むために、「ソーシャルスキル学習」を取り入れる必要があると考えた。これらの学びを通して、家庭や地域との連携を推進し、一体となって子どもの心身の健康の保持に努めることが求められると考え、本研究を行うこととした。

2 研究内容

（1）めざす子ども像

自他ともに尊重しあい仲よく生活できる子

（2）仮説と手だて

研究主題に迫るため、以下のように仮説を立てた。

仮説1 特別活動、道徳科を編成し直し、学校保健委員会 HWT や、保健教育で、教科横断的に命の大切さや包括的性教育を学ぶことで、自分も相手もかけがえない命であることに気づき、互いを大切にすることができるだろう。

手だて① 教科横断的で系統的な教育課程の編成実施

セイ（性・生命）に関わる内容については、保健体育科、道徳科、特別活動を関連付けながら、

全学年を通した教育課程を編成し、計画的に実施する。また、包括的性教育の理解を深めるため、読み聞かせボランティアに関連する絵本の読み聞かせを依頼する。

手だて② 学校保健委員会 HWT（ハートウォーミングタイム）の実施

命の大切さや包括的性教育について知識をつけるために、専門講師を招き、HWT を実施する。

仮説2 ソーシャルスキル学習について全校で学ぶことで、自他を大切にする行動が身につく、尊重し合い、よりよい人間関係を構築できるようになるだろう。

手だて③ ソーシャルスキル学習 にこにこしごうの日の実施

ソーシャルスキル学習とともに、他者と触れ合う活動、感謝や挨拶について考える活動を定期的に実施し、自他を大切にする行動や互いを尊重し合う関わり方について学ぶ。

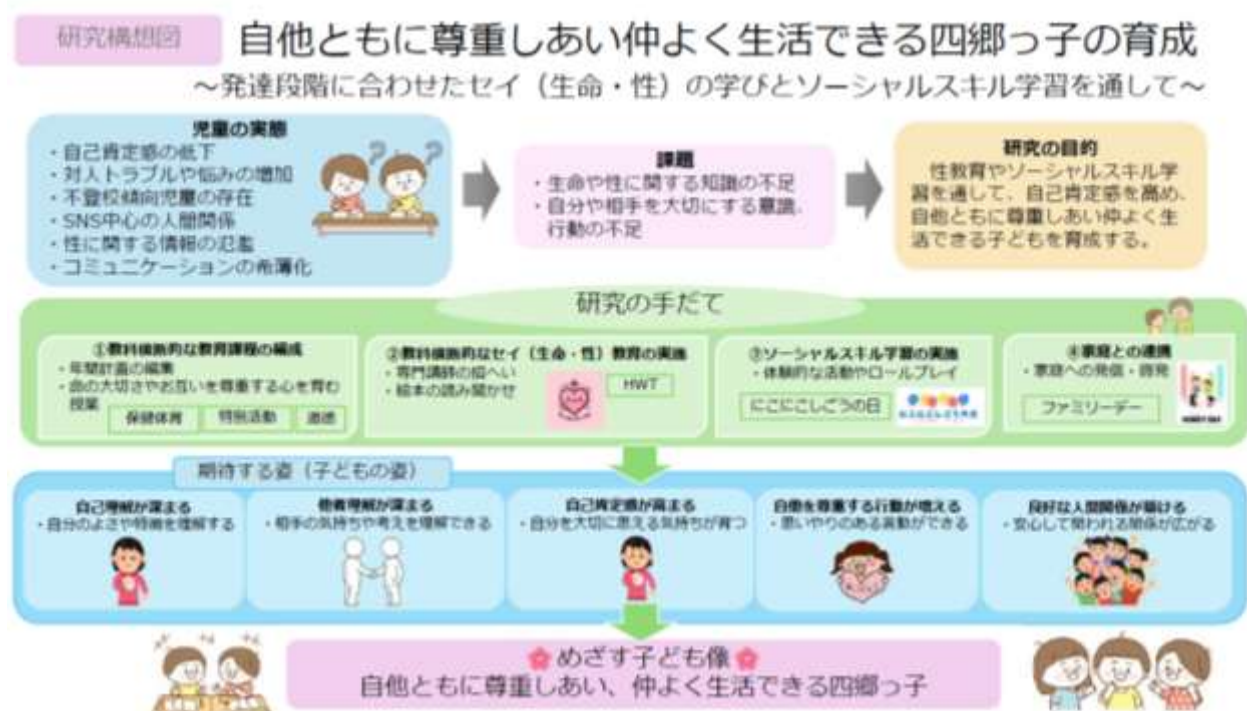
手だて④ ファミリーデーの実施

HWT やにこにこしごうの日で学習した内容をファミリーデーブックにまとめて持ち帰らせ、児童が学んだことを保護者に伝える機会を設ける。

（3）抽出児童 児童 A…令和7年度5年生

〈実態〉	〈期待する姿〉
・友達との関わりを大切にし、周囲や家族への気配りができる。学級内でも明るく会話をする姿が見られ、友達との関係は良好である。 ・一方で、自分の気持ちや考えを優先することが苦手で、周囲に合わせたり自分の思いを我慢したりする様子が見られる。 ・自分自身に対する肯定的な捉えが弱く、失敗や周囲からの評価を過度に気にする傾向がある。 ・担任との面談や日常の関わりの中では、自分に自信がもてず、生きづらさを抱えていることがうかがえた。	・自分のよさや頑張りに気付き、自分自身を肯定的に捉えながら生活することができる。 ・自分の気持ちや考えを大切にし、必要に応じて周囲に伝えたり相談したりすることができる。 ・他者との関わりの中で、互いの違いを認め合いながら、自分らしく安心して学校生活を送ることができる。

3 研究の構想



4 研究の実際と考察

(1) 教科横断的な教育課程の編成(手だて①)

本研究でめざしている他者と関わる力や自尊感情の育成、包括的性教育の知識の会得は、一つの教科のみの指導や一年間の取組だけで十分に育成できるものではない。そのため、「知る」「考える」「実践する」という学びを点で扱うのではなく、各教科を横断的に関連付け、継続的に指導する必要があると考えた。そこで、各学年の年間指導計画において HWT や関連する教科、道徳科などとのつながりが明確になるように色分けを行い、時期の調整を図るなどして、教育課程を編成した(資料1)。読み聞かせボランティアにも協力を依頼し、指導の時期に合わせて、包括的性教育にちなんだ本の読み聞かせを年に1回依頼した。活動の中で児童は既習内容と関連付けながら学習に取り組む様子が見られた。例えば、授業や振り返りの中で「前に道徳で勉強したこととつながった」「似た話を道徳でもやった」などの発言が増え、学びを連続的に捉えようとする姿が見られた。

また教育課程を横断的に編成したことで、担任間や専科教員などとの連携が促進され、指導内容を共有しながら学習をつなぐ意識が高まった。これにより、単発的であった指導が系統的に位置付けられ、継続的な指導につながった。また、性や命に関わる単元において、担任と養護教諭が TT で授業を行い、学びをより深められるようにした。理科専科と実施した5年「人の誕生」での発展授業「赤ちゃんだっこをして、命を感じよう」では、まず人の誕生について科学的に学んだ。その後、赤ちゃんがどのようにお母さんの体の中に入っているか、精子と卵子の結びつき、受精の奇跡、赤ちゃんとして育てられてきた話などを話した後に、赤ちゃんだっこの体験をした。児童 A は兄弟が産まれたときのことを思い出しながら、「親が困っていたら、手伝ったりだっこしたりしてあやしたり面倒を見たりしたい」「バカにする人がいたら注意したい」という感想をもった。他者を思いやる気持ちが高まったと考えられる。(資料2)

資料1 第5学年年間指導計画



【養護教諭 TT の授業】

- 2年：生活科「じぶんはっけん」
- 4年：体育科「体の成長」
- 5年：学活「野外学習前の性教育」
：理科「人の誕生」
- 6年：体育科「がん教育」

資料2 児童 A の感想(5年理科生命の誕生 TT)

資料2 児童 A の感想から

- ・意外と重かった。しっかりだっこできてよかった。(次男と三男をだっこしてたからかな?) 親が困っていたら、手伝ったりあやしたり面倒を見たりしたいです。
- ・もし大人になったら、人をばかにしないで、普通に接していきたい。ばかにしたら失礼だし変だから。なんでばかにするかわからない。逆にバカにする人がいたら注意してあげたい。

(2) 学校保健委員会 HWT(ハートウォーミングタイム)の実施(手だて②)

〈令和7年度5月:「牛乳を通して、命の大切さを知ろう」講師:久保田健一氏〉手だて②-1(3~6年生)

普段は飲み物として飲んでいる牛乳も、命ある存在から生み出されることに改めて気付き、食と命の関係について考えるきっかけとするために、元酪農家である久保田氏を講師に迎えた。牛の世話や出荷現場、牛乳を1L作るのに必要な牛の血液量、酪農家の方からの「愛情をかけて育てた命をいただいて生きていることを実感し、希望や夢をもって生きてほしい。」という思いなどについて見たり聞いたりし、命をいただくことについて考えた。「生き物は親や周りの人が育ててくれた大切なものだと思ったから、自分も動物も、命を大切にしようと思った。」「牛は食べられるために生きる。人は夢をかなえるために生きる。この言葉に勇気が出ました。」と感想を書く児童もいた。講話をもとに食べ物だけでなく、自分や他者の命の尊さに気付く姿が見られ、これからの行動に生かそうとする考えが見られた(資料3・4)。

資料3 児童Aの感想から

・命をいただいているということに感謝し、自分の命につなげて、私たちの生きる意味である「夢をかなえる」をきちんと達成して、また新しい命へつなぐことをいつも忘れないでいることが大切だとわかりました。

資料4 ファミリーデーで児童から内容をきいた保護者から

・子ども自身にはとても身になる時間だったようで満足していて色々話してくれた。親の知らない事を教えてくれてこちらも勉強になった。子供から、今後感謝しながら食べるという言葉聞いて良かった。
・母も参加させてもらい、牛が出荷される場面や久保田さんのお話は涙が出ました。普段お店で売っているのがお肉だと思ってしまっていて、ああ命なんだ、命をいただいていたんだと当たり前の事なのに感謝を忘れていました。その命のおかげで自分の命が生かされている、命は繋がっているんだと思いました。お肉やお野菜を育ててくれた方、運んで売ってくれてご飯を作ってくれる方、全てに感謝ができました。命って目には見えないけれど今日の会のおかげで子ども達にも伝わったんじゃないかなと思いました。素敵な時間をありがとうございました。
・オスは2年の命、メスは子どもを産んでお乳を出して、子どもが産まなくなったら死んでしまうことを話してくれ、牛さんたちがかわいそうで涙が出てきそうだったと話してくれました。牛が死ぬということは、自分が食べるお肉になることだということを家でも話をしました。大切な命を私たちがいただいていることを知るとても良い機会だったと思います。この機会を作っていただきありがとうございました。

〈令和7年度7月：「生命（いのち）の安全教育と健康教育～プライベートパーツってなあに？」講師：仲野恵氏）手だて②-2（1～3年生）

自分の命のルーツを知り、自分のからだを守る方法を知るために、性教育ファシリテーターとして活躍している“なないろの翼”の仲野恵氏を講師として招いた。講演では、プライベートパーツとその守り方、生命の安全教育について話を聞いた。「せんちょうさんのめいれいゲーム」で体の部位の名称を学んだり、性器を模した教材を用いて性器の洗い方を学んだり、絵本や動画から人の誕生のしくみについて理解を深めたりした（資料5）。講演後、教室での振り返りやファミリーデーで保護者に話した内容には、「自分の体は大切だから、守らないといけない」「いのちがうまれることはきせきだ」と書かれており、自分の身を守る方法や自分の命がかけがえのないものだということを知ることができた様子が見えたりした。

資料5 講演の様子



資料6 保護者アンケートから

・普段から兄弟でふざけているときに「ちんちん」や「死ね」という言葉が行き交っており、とても気にしています。家庭でもこれらの言葉について都度話していますが、本人たちは分かってはいるものの発してしまうのが現実です。授業を機にそれぞれの意味を理解して発する頻度が少なくなっていければと思っています。
・年齢が上がると性教育に対して恥ずかしさが出てきてしまうので、低学年のうちにこういう話題に触れさせてもらえてありがたいです。



〈令和7年度9月：「いのちの授業 いのちのバトンタッチ」講師：鈴木中人氏）手だて②-3全校

限りある命の大切さについて学ぶために、“いのちをバトンタッチする会”代表であり、長女を小児がんで亡くした経験をもつ鈴木中人氏を講師として招いた。鈴木氏から長女・けいこさんの話を聞く中で、涙を流す児童や保護者・教員の姿も見られ、心に残る学習の場となった。児童の感想からは「自分の命は自分のものだけではない、みんなに愛されて生きているから、自分の命を大切にしたい」「なにがあってもお父さんやお母さんより先には死なない。自分が今できることを精一杯やりたい」と今自分が生きていることや自分の命の大切さについて実感し、これからどう生きていくのか考えた様子が見えたりした。児童Aの振り返り（資料7）には、これまで抱えていた不安について、考え直したことが記されていた。また、自分の命が自分のものだけでないことに気付いたと読み取れる記述も見られ、自身の大切さを改めて実感する時間になったと考えられる。

資料7 児童Aの感想から

・前に、『自分は必要とされていないかもしれない』と思ったことがあります。そのころは自分に自信がなく、『なんで生きているのだろう』と考えてしまうことがありました。でも、そんなことをしたら後悔すると思ったので、やめたことがありました。

資料8 保護者アンケートから

・死やお葬式などを体験したことがない子どもには、死の恐怖や悲しみが具体的に伝わらなかったかもしれないが、「死ぬことがどれだけ周りの人を悲しませるのか」や「死は人としての終わり。生きることはとても大切。」ということは伝わったと思われる。子を持つ親としては、話を聞く前から心構えを持って臨んだが、やはり悲しく、自分に置き換えたらと思うととても辛く、涙が出ました。今ある毎日は当たり前ではなく、毎日が奇跡の連続だと思い、これからの日々を大切に過ごしていきたいと思いました。また、我が子へも大切に思っていることをもっと直接的に伝えていこうと思いました。とても意義ある講話を聞く機会を与えてくださりありがとうございました。
・鈴木さんのお話は、子どもたちの心に深く響いたようです。「自分たちが今元気でいられることは奇跡だから、自分の命も他の人の命も大切にしたい」と子どもたちが口にしてくれたことを、とても嬉しく思いました。ご自身の大切な体験を通して、貴重なお話をお聞かせいただき、心より感謝申し上げます。

(3) ソーシャルスキル学習 にこにこしごうの日の実施(手だて③)

生命・性教育を通して、自分や他者を大切にすることの重要性を理解した上で、その思いを行動として表現させるために、相手との関わり方やコミュニケーションの方法を身に付ける必要があると考えた。そこでソーシャルスキル学習を取り入れることとした。全学年で統一して実施できるように、日課を編成し、月1回ソーシャルスキル学習の時間を30分間設定した。

児童Aは、「いいところみつけ」の時間に友達から自分のいいところを教えてもらって、自信喪失していた自分に気づき、ポジティブに考え直せた様子がうかがえた。(資料10)「上手な断り方」の時間からは、「断ることも大切だとわかった。自分はいいと思っていても相手はそうでないことがあると知った。自分も相手もいい気持ちでいられるようにしたい」と自分も相手も大切だと理解し、行動しようとする様子がうかがえた。

資料10 児童Aの感想

最近自分は情が不安定で、自己中で何のこともはかたて、ネガティブになるけど、これを克服して、自分という性格を人にならなくて、初めて気づけた気がして、なにかほこりしました。

資料9 にこにこしごうの日年間計画

日付	内容	ファミリーデー
4月24日(金)	いいところみつけ 「クラスの仲を深めよう」	○
5月25日(月)	コミュニケーションスキル 「ちよんとい声の大きさ・同じ言葉でも意味が変わる・・・?」	○
6月25日(木)	アンガーマネジメント 「感情をまんでできるようになろう」	○
9月25日(金)	「ふわふわ言葉・ちくちく言葉」	○
10月26日(月)	「相手の気持ちを想像しよう」	○
11月25日(水)	「きちんと謝ろう」	○
12月21日(月)	アサーショントレーニング 「相手を傷つけずに自分の意見を言おう」	○
1月25日(月)	アサーショントレーニング 「上手に断ろう」	○
2月25日(木)	1年間の「にこにこしごうの日」 ふりかえり	○
3月	にこにこしごうの日 なし	×

資料11 児童の感想から

・共感してから自分の本音を伝える力や相手の気持ちを考える力が大切だと思いました。これからは、ふだんから友だちのいいところに気付いて伝えたり、相手のことを気遣ったりしたいです。
・友だちとの関わり方を確認したり、普段あまり話さない子のいいところみつけをしてみたりして、友だちとの仲が深まりました。中学でも大切にしていきたいです。

(4) ファミリーデーの実施(手だて④)

HWT やにこにこしごうの日の学習で学んだことを家庭にも広げ、実践につなげられるようにするために、学んだことを保護者に伝える宿題「ファミリーデー」を設定した。実施した当初は、保護者から「なぜこのような取組を行うのか」といった意見が寄せられた。そのため、取組のねらいや内容を明確にした文書を作成し周知を図った。さらに、扱う内容を工夫しながら継続的に実施したことで、次第にそのような意見は見られなくなり、「教科書以外の学習でどのようなことを学んでいるのか知ることができてよかった」「自分の子どもが友達からどのように思われているか知ることができ、うれしかった」など、肯定的な意見が多く寄せられるようになった。

また、児童は学んだことを家庭で伝える中で、自分の考えや感じたことを言葉で表現する場面が増えた。「家でもやってみた」「家の人に伝えたら喜んでくれた」といった振り返りも見られ、保護者からは「おうちでの関わりでも伝え続けたいと思います」との感想が寄せられた。これらのことから、学習した内容を日常生活や家庭生活に広げ、自他を大切にすることへの意識の高まりが見られた。

5 研究の成果

(1) 仮説1について

各学年で発達段階に応じた包括的性教育に関する教科横断的な指導計画を編成したことで、どの学年でも、性教育や生命の安全教育、命の教育を含めた包括的性教育に関して学ぶ機会を設けることができた。プライベートパーツ・性被害・二次性徴・自分の命や自他を大切にすることなどについてこの研究前と比較して理解できたことが児童アンケートからわかった。ま

資料12 児童アンケート



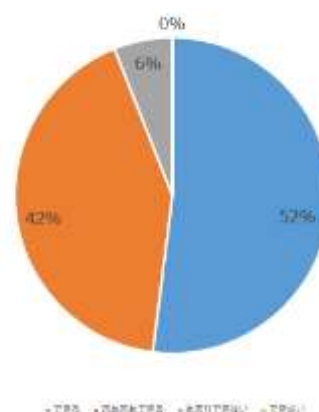
た、R6 年度の実践前と、R7 年度実践後とのアンケートを比較すると、「自分も相手も大切にしよう」と心がけていますか? という質問に対して、「はい」と答えた児童の割合が顕著に増加した。子どもたちの 1 年間の振り返りからは、「今いる友だちを大切にしたい」「ふわふわ言葉をたくさん使いたい」など、自分も相手も大切にしていることがわかった。

(2) 仮説 2 について

日課を変更し、ソーシャルスキル学習について全校で学ぶことで、自他を大切にできる行動が身につく、尊重しあう方法を知ることにつながった。ファミリーデーの保護者アンケートでは、内容について「とてもよかった」「よかった」と答えた家庭がどの回でも 95% を上回った。アンケートでは、「自分の考えを相手に伝えることができる」と肯定的回答をした児童が 90% を上回った。また、振り返りには友達の考えや気持ちを理解しようとする記述が多く見られた。さらに担任からは友達同士で認め合ったり協力したりする姿が増えたと評価を得た。これらのことから、児童は自他を大切にしながら互いを尊重し、良好な人間関係を構築する力を高めることができたと考えられる。

資料 13 R8 年度 6 年生アンケート

自分の考えを相手に伝えることができますか?



(3) 児童 A の変容

児童 A は、活動前は自分に自信がなく、自分の思いや悩みを一人で抱え込みやすい様子が見られた。本実践を通して、児童 A は他者とのつながりや自己理解を通して、自分の存在価値を見出し、自分自身を大切にしながら前向きに生きようとする意識が高まったと考えられる。よって（仮説①自分も相手もかけがえのない命だと気付くこと、仮説②尊重しあうことができる）めざす子ども像「自他を尊重しあい仲よく生活できる子」に迫る姿になったといえる。

6 今後の課題

命や性の教育は、一朝一夕に完成するものではなく、継続的に積み重ねながら、子どもの発達段階に応じて発展させていく必要がある。この学びは、これから子どもたちが生きていくうえでの基盤となる知識であると同時に、自尊感情を育み、自己理解や他者理解を深めることにもつながるものである。また、こうした学びは、他者との適切な関わり方や自分の気持ちの表現方法を身に付けるソーシャルスキルの育成とも深く関わっている。したがって、多様化する社会の中で生きる子どもたちにとって、これらを一体的に学んでいくことは極めて重要であるといえる。今後さらに継続・発展させていくためには、命や性に関する学びとソーシャルスキル学習を関連付けながら、系統的な学習として教育計画に位置付け、意図的・計画的に進めていくことが求められる。今回の取組にとどまらず、今後も学校として継続していけるような計画・体制づくりに努める必要がある。

また、今回実施したファミリーデーは、協力的な保護者の理解と支援により、当初の目的であった「アクティブラーニングとして他者に伝える機会の確保」「家庭での会話のきっかけづくり」「子どもの自己有用感の育成」にとどまらない成果が見られた。家庭内でさらに話題が広がり、実生活へのつながりを生み出すとともに、家庭における包括的性教育へと発展する成果も見られた。さらに、家庭での対話を通して、相手の話を聞く姿勢や自分の思いを伝える力といったソーシャルスキルの側面においても、学びが深まったと考えられる。

このような“こころ”に関わる学びにおいては、特に家庭との連携が重要である。今後も家庭を巻き込みながら、学校・家庭・地域が一体となって子どもを支える取組を一層充実させていきたい。